2．沖　縄　で　学　ぶ

――高３日本史の実践――

丸　山　　豊　。

1．はじめに

1986年夏，私は初めて沖縄を訪れた。沖縄大学主催の「'86沖縄セミナー」への参加のためである。そこで体験し，知り得たことはすべて想像を越えるものであった。一社会科教師として，また歴史教育に関わる者として恥しくさえ思ったほどであった。

戦跡をさぐり，証言を聞き，自ら壕の中にもぐり初めて知る沖縄戦。本当にショックであり，何かしなければと思いつつ一年経ってしまった。

1987年，高３日本史は10月に15年戦争の学習に入った。その時期，Ｎ君が愛知県のサッカーチームの一員として沖縄国体に参加することになり，級友の関心は当然のごとく沖縄に向けられていった。青い空，青い海，赤いハイビスカスのイメージしか浮かんでこない生徒たち。何も知らないことは平和なのか？私は昨年の体験をここでぶつけたいと考えて，Ｎ君の国体終了を待って，沖縄の授業実践を計画した。

受験を目前に控えた生徒たちがどう学んでくれるだろうか。沖縄国体の持つ意味を現代史の中で考えようとする姿勢が生まれるだろうか。不安の方が強かった。とにかく生徒たちには，沖縄国体についての新聞・テレビ報道に十分目を通すよう指示を与えておいた。

2．授業への導入をどうすすめたか

資料①1987年10月26日前後の新聞コピー 資料②「読谷村会場での日の丸ひきづり降し報道」のコピー

（いずれも次ページ参照）

Ｎ君帰校後，まず新聞報道（資料①.②）を読ませる。

Ｙ君の意見「海邦国体で開会式の時，国旗を燃やした事件を聞いた時変な人が目立つためかなんかでやったのだろうと思った。」

Ｉさん「（今年の３月）卒業式で君が代を歌う事と日の丸を掲げる事に強く抗議した高校生を不思議に思う。」

「的はずれ」とか「あんな馬鹿な事どうしてやるんだろう」とか「そんなに反抗的なら本土復帰なんて言わなければよかった」大方の高校生の感想である。

新聞の写真をながめていた生徒がつぶやいた。「君が代演奏中，座ったままの人は年寄りばかりじゃないか。」沖縄国体から帰ったばかりのＮ君に聞く。「やはりそんな感じだった。戦争のこととか，基地のことで年をとった人の方が苦しい体験があるみたい。」しかし，新聞を読むと若い中学生も問題にしているようである。本校の生徒たちは「なぜ　沖縄の人は，こだわりつづけるのか」であり，沖縄の中高生との落差は相当なものである。

私は，この落差を大事にしながら一方で短絡的に「沖縄は日本なのだろうか」という切り捨て論に陥入らないように学習の展開を考える必要性を感じた。また，「沖縄はいろいろな事情があったのだろうから仕方ない。」といった同情や特別観に終わらないためにどうしたらよいかという課題も生じてきた。

私が撮ってきたスライドを使いながら，証言や資料で具体的に事実に即して考えていくことを根底に３時間完了をめどに実践に入った。

3．どう展開したか

日本を通史の中で沖縄をとらえていくことを大前提に15年戦争学習での位置け，戦後史の中でも考える。

①沖縄の暦史の流れをつかむこと ②15年戦争の中での沖縄のもつ意味を考えること。 ③教科書にみる沖縄の記述について知ること ④戦後史の中で置かれた沖縄を考えること。

以上が主目標である

（１）沖縄のこだわりはどこにあるのか

表１　1985年度　日の丸揚揚率（少・中・高）

	小	中	高
ヤマトンチュ（本土）	92.5%	91.2%	81.6%
ウチナーンチュ（沖縄）	6.9%	6.6%	0%

1986年度は，沖縄もほぼ100％になったことを教える。85年度から86年度にかけての変化の理由を問い今年度の沖縄国体と関連あることに気づかせる。

（２）沖縄の歴史をどう考えたらよいのか

『海上の道』（柳田国男）

1987.10.26.　朝日新聞より

新聞　第3種郵便物認可

沖縄揺さぶる海邦国体

時時刻刻

気温三〇度を超す暑さと前回特有の激しいスコール。そして会場周辺はどこも警察官の姿。沖縄の秋季国体は二十五日、皇太子ご夫妻を天皇のご名代として迎えて開幕した。ご夫妻はこの日夕には帰りになったが入れ代わりに常陸宮ご夫妻が来着されたり、その後も三笠宮ご夫妻ら皇族が続々、沖縄入りする。日の丸、君が代に対する県民のアレルギー、皇室への複雑な思い。今度の海邦国体は、このような沖縄の心を揺さぶる異例な国体となった。

（国体取材班）

君が代の演奏中も座ったまま、日の丸を見つめるお年寄りや労組関係者
＝25日午後、沖縄県沖縄市の県総合運動公園陸上競技場で

●日の丸　君が代

開会式のあった沖縄市の総合運動公園陸上競技場には観衆約三万人。あでやかな郷土芸能が繰り広げられたあと選手団が入場し、炬（きょ）火点火、国旗掲揚、君が代斉唱に移った。

ほとんどの人が起立した。だが、立っても歌わない人や座ったままの人が会場のあちこちで、ぽつぽつと見られた。

観客席の三万席には、今年六月三十一日米軍の演習納屋地を「人の輪」で包囲したときの参加者の一団がそのときの緑色の三角帽をかぶって座っていた。沖縄県労協、県教組などの計五十人。君が代、日の丸に対して「立たない・歌わない・脱帽しない」の「三ない運動」を続けてきた。「無言の闘争をしにきた」と沖縄県労協の神田操議長（三）。皇太子ご夫妻が入場した時、周りが拍手しても、日の丸掲揚、君が代斉唱の折も、全員が無言で座り、口だけはっきり開いている。起立した人たちの中に、ぽっかり穴があいたようにみえた。

一部は起立、斉唱拒む
一方で「国民として当然」

一団の中には来年国体県となる京都から来た地方公務員（三）らも。「スポーツは平和でそできるもの。膨大な基地を抱える沖縄で開かれた国体が、はたして平和の祭典といえるのか」

別の観客席前の人垣には地元の安慶田中学の生徒たち。ここでも約六百人のうち三年生を中心に約二百人が、国旗掲揚で起立せず、君が代も歌わなかった。伊佐栄勉校長（三）がすっ飛んできて「だめだ」。「会場のアナウンスがよくわからなかった」との答えが返ってきた。「きちんと指導したんですよ」と校長はがっくりしていた。

沖縄市南桃原、中古車販売業広瀬袋広雲さん（三）は、大声で君が代を歌った。昭和二十二年まで移民していたサイパンで覚えた。敗戦はサイパンだけと信じて引き揚げてきた。ところが、郷里の越来村はカタカナの「コザ」に。「私たちの年代は、日の丸、君が代が復帰運動のシンボルだった。でも、抵抗を感じる人の気持ちもわかります。まだ戦争の尾を引いているということでしょう」

那覇市、会社員儀間政勝さん（三）は「沖縄も日本国の一員ですから、日の丸を掲げるのは当たり前ですよ。それよりも大型公共工事がなくなる国体後の沖縄経済が心配です」。

怒声…もみ合い
「日の丸」対立根深く

ソフトの読谷村会場

式典に先立って掲げられた日の丸。テープから流れる「君が代」。沖縄で開かれている海邦国体は二十六日から、一斉に競技が始まったが、競技に先立って県内四十六会場であった開始式では、日の丸掲揚と「君が代」斉唱をめぐって、一部の会場で騒乱が起きた。特に、村が掲揚も斉唱もしないと決めたことで日本ソフトボール協会が会場の変更を申し入れるなどしたソフトボール会場の読谷村では、開始式の途中に、掲げられた日の丸が一人の男性によって引き降ろされ、騒乱。市町村主催の開始式典は、二十五日に沖縄市で開かれた総合開会式以上に、沖縄の歴史と複雑な住民感情を浮き立たせた。

「港川人と日本人のルーツ」
「沖縄方言を日本語との関係」
を示し，日本の中の沖縄をおさえつつ，次に沖縄の本土からどう差別されていったのかにも簡単に触れた。

「琉球王国の成立」「島津支配と近世の沖縄」「琉球処分と自由民権運動」「近代史の中での沖縄」，また，アメリカと沖縄，日本の関係も考えさせた。

「ペリー来航と沖縄」「太平洋戦争の中での沖縄の軍事的位置」「アメリカの戦略としての沖縄を戦後」「アジアでの紛争・戦争と沖縄」「占領，復帰，日米安保条約下での沖縄」など，ざっと大きな歴史の流れをつかむ。この中で15年戦争下での沖縄が現在の沖縄にいかに大きな意味を持っているかを再認識し，沖縄戦に入る。

（3）私たちの沖縄戦についての知識はどれくらいか。

沖縄戦については「ひめゆりの搭」の映画のテレビ放映を見た者が数名，灰谷健次郎著の『太陽の子』などの本で関接，直接読んだ者が数名であり大半が知識はないといった状況であった。

1982年の7月，本校で『ひめゆりの搭』を団体鑑賞させた。その時の感想文から生徒たちの，ひめゆりに関する受けとめ方を紹介しておきたい。

「私がこの映画で一番感動したのは，先生の生徒に対する愛情である。栗原小巻が好きだからかもしれないが，とても人間味あふれる先生だったと思う。男の先生も『我々は軍属ではない。文部者の命令で動いている教師だ。だから生徒を守る義務がある。』というような事を言ったが，これもまたとてもジーンときた。（中略）ひめゆり部隊の女学生たち，彼女たちの義務感はすばらしいと思った。今の世の中ならきっとみんな反抗するだろう。」

映画「ひめゆりの搭」からは，すばらしい師弟愛とけなげな少女の姿に心を打たれてしまった感想が特に女生徒に多かったようだ。戦争への憎しみは感ずるが沖縄戦の本質までとらえるのはむつかしい。沖縄においても，ひめゆりの壕は観光化され，みやげもの屋が並び，これでよいのかといういら立ちさえ感ずる。

（4）教科書では，どう描かれているのか

> 沖縄戦での日本軍の戦死者は約10万人とされる（うち沖縄県出身兵が鉄血勤皇隊・ひめゆり隊などに編成された少年少女をふくめ約2万8,000人）。これに対して一般県民の犠牲者は少なくとも約9万人以上といわれる。沖縄本島の中南部では，一家全滅の例が多く，三親等までの遺族のいない犠牲者が相当にいたという。また日本軍のため，集団自決を強制されたり，壕を追い出されたり，スパイの疑いをかけられたりして少なくとも400人以上の県民が殺された。

『高校日本史改訂版』（実教出版）1986年 P319

かなり詳しい記述となっている。沖縄戦の教科書の記述の推移は最後の時間に扱うことにして，とりあえず沖縄戦を学ぶ視点をこの教科書からまとめてみた。

イ．沖縄戦はいつ始まり，どんな形で終ったのか
ロ．死者の数が推定なのはなぜか（確定でない）
ハ．なぜ一家全滅の例が多いのか
ニ．集団自決，虐殺の実態とその原因
ホ．本土にとって沖縄戦とは何なのか
ヘ．沖縄県民にとって軍隊とはどんな存在だったのか
ト．沖縄に犠牲を払わせ，本土は何を守ったのか

以上を授業の課題として沖縄戦を学んでいくことにした。

4．展開（その2）

①いつ始まったのか（資料，経過図）

1945年	3．23	沖縄空襲開始
	3．26	慶良間諸島米軍占領
	4．1	読谷村への無血上陸

②読谷村への上陸はどんなものであったか
（資料，鑑船，砲弾の具体的な数，米軍上陸数）

○スライド（読谷村の海岸）
「我々（米軍）はまるでピクニックのように靴をぬらすことなく上陸した。」（従単記者の記録）

③日本軍は，なぜ無血上陸を許したのか
（資料，米軍と日本軍の差の具体的数）

「出血持久作戦」とは何か。
「拾石作戦」とは何か。
住民の立場はどうなるのか？

沖縄戦開始時期については，他資料との日時のズレに気づかせ「太平洋戦争」の中での硫黄島と沖縄と本土の関係を考えさせた。上陸の様子は，私が撮ったスライドをもとに説明。日本軍の作戦が本土決戦の時間かせぎ，つまり「拾石作戦」であったことに触れる。

④激戦地は，北部なのか南部なのか（資料，経過図）

○スライド（ガマー石灰岩地帯の壕一の風景）ガマの多い南部を主戦場とすることで住民を巻き込んだ長期戦を想定した可能性を指摘。

⑤住民の立場はどうなるのか

住民が総動員される。ひめゆり部隊，鉄血勤皇隊，物資，食料は自給自足，本土決戦のモデルとされたのではないかという疑問。

⑥応援部隊は本土から投入されたのか

米軍に対抗できる投入実施は困難。本土防衛，決戦を最優先するなら，沖縄でなるべく多くの時間をかせいでほしいと考えるだろう。となると沖縄は「とかげ」のシッポにあたったのではないか。

⑦その後の経過

○スライド（首里城跡，軍司令部壕）
○スライド（南風原陸軍病院壕跡）
○スライド（糸数壕）
○スライド（摩文ニガ丘）

立ち木一本も残らず砲撃され全滅した首里城の軍司令部。そこを放棄して南下，重傷患者数千名が自決。ついに移動せざるをえなかった南風原陸軍病院。住民が追い出され，玉よけにさえなったといわれるガマの数々。そこは今，一面のさとうきび畑である。

6月23日，「全軍，最後まで敢闘せよ」と言いのこして自決したといわれる牛島軍司令官の慰霊の碑が立つ，摩文ニが丘。沖縄戦の終了は，いつなのだろうか。

⑧沖縄戦の六つの視点とは

1．住民の巻き込んだ唯一の国内戦
2．鉄の暴風といわれた長期の戦争
3．現地の根こそぎ総動員
4．一般住民の戦闘参加
　スパイ容疑と住民の自決・虚殺
5．軍以上の住民の戦死者
6．米軍の占領継続，基地と現代

⑨戦死者がはっきりしないのはなぜだろうか

清水書院『高等学校日本史新訂版』（226ページ）では，『沖縄県史によれば，沖縄では一般住民15万人が戦火に倒れ，日本軍死者も9万人を超えた。』となっており教科書によって相当のひらきがある。正確に調べがついていないということは，現在の遺骨の収拾が完了していないことをうかがわせる。一家全滅が多く，家が途絶えてしまい犠牲者の数すらつかめないのではないか。

⑩住民の犠牲者が正規軍人より上まわるということは本土及び日本軍沖縄の人々に対する見方に問題はなかったか

（資料，「爾今，軍人軍属ヲ問ワズ標準語以外ノ使用ヲ禁ズ」）
○沖縄方言で話した者は，どうなったか。
○なぜこのような命令が出されるのか。
（資料，「原住民に気を許してはならぬ，原人民は敵が上陸してきた時……。」）
○南方諸島占領の時の戦訓である。沖縄の人々のおかれた立場と比較して考えてみよう。

このような資料を提示することにより，スパイ容疑に気づかせることができる。

⑪集団自決がどのように行われたか

（資料，廃墟となったさとうきび畑の一角の写真）
（資料，17才の一少女の体験）
（資料，ナヘおばさんがみたもの）

⑫なぜ集団自決をしたのだろうか

軍隊はほんとうに沖縄の人々を守ったのだろうか。
前門の虎，後門の狼とは何か。

⑬住民虐殺は，なぜ，どのように行われたのか

（資料，住民虐殺の事例）
（資料，住民前田ハルさんの証言）…次頁参照

⑭追いつめられた住民たちは？

（資料，シューサイドクリフ）

シューサイド・クリフ（自殺の断崖）と呼ばれた，キーザバンタにガソリンがまかれひしめき逃げまどう住民が海に身を投げていった。
○スライド（ギーザバンタ）

5．沖縄学習から学ぶこと

沖縄には「命（ぬち）どう宝」という言葉がある，命が重も尊いもの，玉として砕けるより瓦でもよいから命を全うしたいという沖縄の人々たちをどこまで理解できるのだろうか。戦争につながる一切のものを否定したいという沖縄の体験こそ，私たちの歴史の教訓として学んでいかなければならない。

戦跡をめぐり「糸数壕」にもぐったあと，初老の男

住民の証言

旧真壁村真栄平　前田ハル　（当時十九才）

朝は弾がこないもんだから　朝はみんな水くみに行ったんですよ　すると新下茂の甘蔗殿の上で　うちの子どもら二人が　姉さんよう！　といって　泣いていたんですよ　この子どもたちは　前新川小の門のところでやられて　あそこから這ってきたらしいんです

一人ずつつれてきて寝かしてから　お母さんはどうしたか　といったら　お母さんはやられて　あそこで死んでいるはず　セイユウはこの辺に死んでいるはず　といったんです　どうしてお母さんはやられたか　ときいたら　日本の兵隊が来て　ここは何名いるかときいたが　お母さんがあんまり口がきけないもんだから　フィフィと言ったんです　ハイハイ何ですか　という意味ですが　だが　すぐ斬ったらしいですね　首がユキ姉さんのうえにとんでいったので　騒いで　わたしのすぐ下の妹が弟をおんぶしてですね　逃げて　わたしのところへ行こうとしているとちゅうで　前新川小の門の内にひっぱられてですね　弟をおんぶしている妹を刺したから　妹は手をはなしたらしいんです　妹のほうはですね　三カ所刺されていまして　腸があちらからも出てこちらからも出ていましたが　弟のほうは　うんと強く刺されて　長く切ってですね　これは腸がばらばらに出ておったんですが　早く死にました

二人があんまり水をほしがったので　水を汲みにでかけました　わたしはその時　末の弟と　与那城の子と三人が　道にそったところに並んで死んでいるのを見ました　二人とも大きく腹を切られたとみえて　腸や胃などが　ぜんぶ出ていました　また　水汲みに行きますときユキさんたちのお父さんは　ガジマルの木によりかかって　あぐらをかいて　坐ったまま首を斬られて　お金こんなに抱いて　首もこんなに抱いて　こんなにして　わたしは　ハッサミョー！おとうさん　ここでやられたんですね　と言っただけで　もうどうすることもできません　銀バエがたくさんおとうさんにたかっていましたですね

戸まで行ったら　この井戸のそばの道に　幸重さんねておったですよ　もう　あんたも亡くなりましたねと　もうそれだけです

妹と弟とは　一人は四時間　一人は三時間生きていました　水を飲まして　二人　手をにぎって　もう死ぬまえガチガチ　ガチガチふるえてですね　姉さん　わたしたちは死んでいくが　姉さんはどうするつもりね　と言うので　姉さんも追っていくから何も心配しないで楽になりなさいね　と言って寝かしたんですが　一人はあんまり苦しがってですね　ガチガチしながら　大きな声をだして泣いて　死んだんですよ

こっちに布きれがありましたから　姉さんも今死ぬから手をとってくれね　と言って　首を絞めましたが　苦しくなるとやめて　とうとう死ぬことができませんでした　そんなにして三回首を絞めましたが　苦しくなるとやめて　とうとう死ぬことができませんでした

それからわたしは　お母さんを見に行ったんですよ　お母さんは　兵隊が四、五間くらい持っていって　ねかしてありました　お母さんを見たら　わたしはたまらなくなって　兵隊たちに反抗したんですよ　なぜこんなにしたか　と言ったんです　戦争だから仕方ない　と言っていました　いくら戦争だって命は一時間でもほしいが　うちはこんなに親兄弟もみんな殺されて　こうなったんだから　斬ってくれ！　と言ったら　一人の兵隊はほかの兵隊に　やれ！と言いましたよ　この兵隊は何も持っていません　そしたら　ほかの一人の兵隊が　あんたは若いから　国頭まで私といっしょに行こう　と言ったが　いいえ　家族といっしょにここで死ぬから　と言ったんだが　やらなかったですよ　この兵隊は銃剣をもっていましたが……

よく日　壕の前をアメリカの兵隊が行ったり来たりしていました

『平和への証言』（二二ページ）　沖縄県発行

●――四度書きかえられた教科書

昭和五八年度から使用される実教出版発行の高校用「日本史」が問題の教科書。第一二章「第二次世界大戦と日本」の第三項「太平洋戦争」の沖縄戦に関する脚注の部分が問題になった。執筆担当は、江口圭一愛知大教授。原稿本（白表紙本）では次のようになっていた。

原本

「六月までつづいた戦闘で、戦闘員約十万人、民間人約二十万人が死んだ。鉄血勤皇隊、ひめゆり隊などに編成された少年少女も犠牲となった。また、戦闘のじゃまになるなどの理由で、約八百人の沖縄県民が日本軍の手で殺害された」

この部分が、文部省の検定で、「数字に根拠がない」として書きかえを命じられた。江口教授は「歴史学研究会編『太平洋戦争』に基いた」と説明したが、「本自体に根拠がない」と認められなかった。

やむなく、第一次修正文では次のように書きかえて提出した。

第一次

「六月までつづいた戦闘にまきこまれて、十数万人の沖縄県民が死んだ。鉄血勤皇隊・ひめゆり部隊などに編成された少年少女も犠牲となった。また、スパイ行為をしたなどの理由で、日本軍の手で殺害された県民の例もあった」

第二次

「六月までつづいた戦闘にまきこまれて、約九万四千人の一般住民が死んだ。鉄血勤皇隊・ひめゆり部隊などに編成された少年少女も犠牲となった。また混乱をきわめた戦場では、友軍による犠牲者も少なくなかった」

この第二次修正文も受け入れられなかった。第三次修正文では次のようになった。

第三次

「六月までつづいた戦闘にまきこまれて、約九万四千人の一般住民が死んだ。鉄血勤皇隊・ひめゆり部隊などに編入された少年少女も犠牲となった。なお、『沖縄県史』では戦場の混乱のなかで、日本軍によって犠牲者となった県民の例もあげられている」

第四次

「六月までつづいた戦闘で、軍人・軍属約九万四千人（うち沖縄県出身者約二万八千人）、戦闘に協力した住民（鉄血勤皇隊・ひめゆり部隊などに編成された少年少女をふくむ）約五万五千人が死亡したほか、戦闘にまきこまれた一般住民約三万九千人が犠牲となった。県民の死亡総数は県人口の約二〇％に達する」

性が私に語ったこと。

「私はあと時，このガマの中にいたんですよ……。ケガをして，ウジがわいていました。友軍（日本軍）が恐かった。米軍の捕虜となった時，助かったと思いました。」現代史としての沖縄（占領，基地，安保条約）等は戦後史の中でふれていくことにして，最後に，教科書問題をとりあげ，歴史とは何かを考えさせることとした。

（1）教科書問題と沖縄

（資料，4度書きかえられた教科書）…前頁参照

「原本から第4次の中で，記述の何が問題となっているのだろうか。」

じっくり読ませ，上の質問をした。驚いたことにほとんどの生徒が気づいたのである。そして「日本軍が沖縄住民を殺害，虐殺したことをなぜ教科書から避けようとするのだろうか。」という疑問が自然に生じてきた。では，「君たちの使用している教科書は？」と問い比較させる。そこには集団自決，スパイ容疑，虐殺も記されていることに気づく，この一歩前進の背景に沖縄の人々の願いや，教科書の執筆担当の歴史研究者の努力や国内世論が反映されていることを指摘。生徒は感想文の中で次のように述べている。

「もっと深く理解するためには，教科書に書いてあることだけを，うのみにせず，もっと真実を求めようとする姿勢が大事だと思う。」

歴史を学ぶ最も大事な点を自ら語っている。

（2）音楽の教科書と沖縄「さとうきび畑」

中学の音楽では沖縄民謡なども取り入れられている，偶然「さとうきび畑」が載っており早速資料として用いることにした。

高3の生徒を前に私が1～3番まで歌う。さとうきび畑の様子は，スライドですでに見ている，詩の風景は今もそのままである。

「昔，海の向うから戦争（いくさ）がやってきた。」

「あの日，鉄の雨にうたれ，父は死んでいった。」

「そして私の生まれた日，戦争（いくさ）の終りがきた。」

……ざわわ，ざわわ…のこの歌のメロディーと詩は沖縄を知らない者にとって実に奇妙な調べであろう。ある生徒はこう言った。

「中学校の音楽の教科書に載っていたような記憶があるが，(この歌の意味を)余り説明してくれなかった。音楽の授業でわけも分からず歌わされた私たち生徒は『ナニ！，この歌！』と半分バカにするしかなかった。」

6．おわりに

授業に「沖縄で学んで」とし600字～800字のレポート（感想文）を課した。全員提出した。どれも自分の問題として真剣に取り組んだものだった。

一部を列挙したい。

①沖縄を考える時，かわいそうだという同情的な見方は何の解決にもならないでしょう。戦後日本が平和に過ごす一方，今だに沖縄は基地問題を始めとする戦争の負債を抱えています。我々は常にそこへ目を向けることが必要ではないでしょうか。（男子）

②私は近代の日本史になってから特に日本史の授業が楽しみになりました。と同時に自分がとても恥しく感じました。あまりにも何も知らなさすぎると感じたからです。（女子）

③本土の人が沖縄を理解していないのは，日本史の教科書と授業のせいだと思う。私は沖縄のことを，この授業で習って初めて知った。小，中学校の社会科の教科書にも沖縄戦についてはほとんど書いてなかったし，先生も沖縄戦について話してくれなかったからだ。第二次世界大戦のところで話題になるのは，いっも広島，長崎の原爆だけだった。（女子）

④沖縄海邦国体が行われようとしていた頃，くしくも我々は日本で沖縄戦を学習した。ちようど毎日のように関係記事が載っていて，ずいぶん詳しく勉強できたように思う。国体の開会式で，国旗が焼かれる事件が起こった。このことが報道されて新聞の読者投稿欄がにぎやかになった。徹底的に批判するものから，気持ちはわかる，といったものまで多種多様な意見が出されていた。事件には背景というものが必ずある。その背景にあるものは，沖縄戦における日本軍であろう。しかし学習は学習であって体験ではない。体験した者でないと絶対わからない何かがあるはずである。それがある限り心と心の隔りはまず解消されないと思う。そして今すべきことは，事実を正しく調査分析し，それを明らかにすることではないか。（男子）

⑤僕が高校で沖縄戦を学ぶまでに，沖縄について知っていたことといえば，イリオモテヤマネコとヤンバルクイナ，中国と日本とアメリカが一緒になったようなイメージだけだった。「ひめゆりの搭」も見なかった。中学の歴史は，明治維新のころまでしか習わなかった僕にとって，沖縄はまさに遠い日本の端っこの島であった。沖縄は「捨て石」だった。本土上陸を少しで

も先に延ばすためにとられた作戦だったが，結局沖縄だけ上陸された。戦死者は推定15万人から20万人といわれている。この人たちはなぜ，死ななければならなかったのか。彼らはその時，日本人だったのだろうか，沖縄人だったのだろうか。死者の数が多かったから悲しいのではなく，死ななくてもいい人たちが死んでしまったから沖縄は悲しんで怒る。（男子）

⑥夏になると，地下鉄の入口は旅行会社のパンフレットであふれていて，沖縄はそのトップを飾ることが多い。そのイメージは，やはり海のきれいな南の島，である。今回，沖縄戦について学習し，沖縄のイメージは以前とは勿論かわり，全く知らなかった事実は本当に驚かされるものばかりだった。イメージが変わったというのは決して暗くなった訳ではない，今年の2月だったか，沖縄の高校で卒業式に日の丸を飾ることに生徒が反対したというニュースがあったが，私はこのニュースを見た時，今思えば本当に何も知らなかったと思い知るが，少し不思議に思ったことを記憶している。というのは，日の丸や君が代に対して今の沖縄で起こっているようなことが本州などでもあったとは聞いていたが，それは戦後しばらくの間ということだったのだろう。というより，不思議に思って母に尋ねたら，母がそう答えたのである。今回の学習で，私は日本人による沖縄県民虐殺の内容を始めて知った。この行為のむごたらしさを知らない人が今までの私も含めて，どんなに多く存在することか。私はまず自分のできる最初のこととして，母のあの言葉を訂正させた。戦後の一番犠牲になった国だと思っていたが，日本の原爆が投下されてシンガポールの人々が喜んだ理由の原因に似たものは，いたる所に転っている。教科書は『日本軍による沖縄県民虐殺』を決して省くべきではないし，日本史の教科書であるなら，欄外に載せて済ますことでもないと思う。沖縄のこうした事実を紹介するものは，少なくとも私の周辺にはほとんど無かった。沖縄が日本の領土である以上，この事実はもつと多くの人に知られるべきである。広島や長崎を含めて，私達が戦争に対する意識を絶えず持ち続ける必要は十分あるのだ。（女子）

「真実を知らない。」これでは現実に流される。現代の青少年の現実への妥協（というより適応）は，「事実を知らされていない」ことから，「学ぶ必然性は受験のみ」といった教育の結果である。

海邦国体は，私と生徒たちを鍛えてくれた。

参考文献

外間守善『沖縄の歴史と文化』（中公新書）
柳田国男『海上の道』
大城将保『沖縄戦』（高文研）
新崎盛暉他『観光コースではない沖縄』（高文研）
沖縄県『平和への証言』（沖縄県立平和祈念資料館ガイドブック）